

知床の森から



北見営林支局 知床森林センター 〒099-41 北海道斜里郡斜里町本町15番地
TEL 01522-3-3009 FAX 01522-3-3160

ログハウス風 合同庁舎完成



北見地方の木材をふんだんに使った、ログハウス風の知床森林センターと斜里営林事務所の合同庁舎がこのほど完成しました。新庁舎は木造一部二階建てで、延べ面積569㎡、外装にエゾマツ・トマツの半割り丸太を使用した山小屋風の外観が特徴です。

内部は事務室のほか、知床の動植物を写真パネルなどの資料で紹介する展示室やビデオなども使って知床の自然を紹介するセミナー室も設けられています。

建物全体に、構造材としてトマツ・カラマツなど、内装材としてミズナラ、セン、ニレなどの北見営林支局管内の国有林から生産された木材を使用しているほか、窓も木材サッシを使用しております。普通の木材住宅での木材使用量は、1㎡当たり0.17㎡ですが、新庁舎では、約0.35㎡と2倍になっています。

建物を見て、中に入って直に手に触れて、美しさ、香り、温もりなど、木造建築の持つ優れた特徴を理解していただけるものと思います。

今後は、これらの施設をフルに活用して森林・林業に対する理解を深めて行く努力をしていきます。

知床においでの際は是非お寄り下さい。職員が知床の動植物などについて説明・ご案内いたします。



写真は新築された合同庁舎

◆技術開発の成果を研究発表◆

平成元年度、北見営林支局業務研究発表会が2月上旬、支局で開催されました。発表は17課題にのぼり知床森林センターからは、村上業務係長が「知床のミズナラドングリの結実について」の調査結果を発表しました。

調査の結果、平成元年は2年ぶりの豊作であったこと、落下ピークが札幌と10日間程度ずれていること、あとに落下したドングリが大きく、ゾウムシの被害を受けていないこと、潮風の影響を受けない方が結実量が多いこと、知床のミズナラは、モンゴリナラの影響が強いと考えられることなどが判りました。

今までミズナラは結実調査記録が少ないことから、森林総研、農業高校などの審査員から高い評価を得ました。今後とも知床の森林生態系に関連して、着実に研究を進めていきます。

「知床のキノコ類の リスト作成される」



知床のキノコ類については、1959年に亀井・五十嵐氏による調査が行われたのみで、それ以上の詳しい調査は行われていませんでした。

知床森林センターで、1989年秋の森林調査の際に採取・確認したキノコと、亀井・五十嵐両氏の調査結果を合わせてリストを作成しました。



写真はウスケタ(食用)

今回の調査で、ヒラタケ科1種、マツタケなどのキシメジ科10種、テングタケ科1種、ハラタケ科3種、ヒトヨタケ科、モエギタケ科、イグチ科、オニイグチ科各1種、ベニタケ科3種、アンズタケ科、ホウキタケ科、イボタケ科各1種、タコウキン科3種、ツチグリ科1種、ホコリタケ科2種、アミガサタケ科、ピロネキン科各1種の17科33種が新たに確認されました。

このうちマツタケは東限の可能性がありますが。これによって、知床では合計22科66種のキノコが確認されたことになりすが、全体ではこの3倍は知床に分布するといわれておりますので、更に調査を続けていきます。

流水 & 知床

厳冬の使者“流水”がオホーツク海を2年ぶりに埋めつくしました。この流水、最近では冬のイベントに欠かせないものとなっていますが、斜里町には流水にまつわる悲惨な歴史が埋もれています。

1807年北方警備のため駐屯していた津軽藩士102名中、72名が越冬中飢えと寒さからくる浮腫病により斜里の地に没したのです。「松前詰合日記」によると、「一同は海が凍るということは全く知らなかったことから……日増しに氷が張り、その上へ氷が押し上げられて大山のようになった。ただ驚き入るばかりであった」と流水接岸の様子が記されています。その慰霊碑が越冬地に近い砂丘上で北風にさらされている姿を見ると、厳冬を乗り越える経験を持たない津軽藩士の敵は“流水”だったと思えます。かつて、陸の孤島と言われた知床は、彩鮮やかな防寒着に身を包み、流水にロマンを求める旅人で賑わいを増しています。

流水はオホーツクの冬の風物詩として定着し、旅情を誘う魅力として無くてはならないものとなっています。



写真は流水と知床連山